

## 「ダントンの死」(ビューヒナー)

大革命勃發の五年後、第一共和制下のフランスでは、ロベスピエール率ゐる急進的なジャコバン派が食糧難に喘ぐ下層市民の憤懣に乗じて勢力を擴大し、革命勢力内部の反対派を次々にギロチン臺に送つてゐた。そして今や恐怖政治の魔手は革命の立役者の一人で人望あるダントンにも及びつつあつた。ダントンは革命の凄慘な現實に絶望して、「ほくにはこれ以上人を殺すやむを得ぬ理由はもう見つからない」とて恐怖政治に終止符を打ちたいと願つてをり、「革命は終はり、共和國が始まらなければならぬ」と考へる穩健派の支持を集めてゐたからだ。他方、ロベスピエールは「清廉潔白」なる革命家として民衆の支持を獲得し、「革命を中途半端に終はらせる奴は、自分の墓穴を掘る事になる」、「惡徳は處罰しなければならぬ。恐怖を手段として道徳が支配しなければならぬ」と主張して、ダントン派を肅清すべく策謀を巡らせた。

然るにダントンは己れの人望に自信を抱いてゐた所爲もあつて、さしたる對抗策も講じぬ裡にジャコバン派民兵に仲間と共に捕へられ、嘗て自らが作つた革命裁判所で裁かれる身となつて了ふ。ダントンは捕縛が知れ渡るや、「ダントンにまで手がのびたか！ これぢや安全な奴ならぬかゝらう」と人々は恐怖に戦き、疑心暗鬼に陥るが、法廷のダントンは自らに對する「誹謗の責め」に堂々と反駁し、己れを「告發した薄汚い奴ら」を罵倒する。聽衆はダントンの雄辯に動かされ、「人心は名狀しがたいほど動搖」する。狼狽したジャコバン派は急遽休廷を宣言し、ダントンを派を陥れるべく「陰謀」説を捏ち上げ、法廷で全員の死刑を宣告する。ダントンは、奴らはパンを求める民衆に「首を投げ與へてゐる」と叫びながら連れ去られて行く。

一八三七年に二十三歳で夭折したドイツの劇作家ゲオルグ・ビューヒナーの作品である。作者の同情は無論ダントンに向けられてゐるが、「血に飢ゑた救世主ロベスピエール」の酷薄無慙を難ずる爲にのみこの作品が書かれた譯ではない。作品冒頭でダントンは妻に云ふ、俺達は「象みたいに厚い皮をした動物」で、「お互ひにただ分厚い皮をすり合はせて」ゐるだけの事、俺達は「ひどく孤獨なんだ」。「分厚い皮」の内側でお互ひが何を感じ、何を考へてゐるか、結局は誰にも分りはしないとダントンは信じてゐる。が、敵對するロベスピエールも亦、可愛が

つてゐた仲間に離反されて衝撃を受け、「俺は孤獨だ」と呟くのである。トックヴイルは名著「舊體制と大革命」に於て、革命時にフランス人が「他のいかなる國民よりも多大の努力を拂はらつた」のは、「革命以前の狀態と以後の理想狀態とを越えがたい溝で斷絶」し、「新しい世界に過去のいかなるものをももちこまない」様にする事だつたが、結局「大した成功ををさめなかつた」（小山勉譯）と書いてゐる。當然である。如何に政治制度を改めても、お互ひ同士「分厚い皮をすり合はせて」ゐる「孤獨」な存在たる人間の宿命迄根絶する譯にはゆかぬ。革命「以後の理想狀態」が疑心暗鬼の巷ちまたと化した所以である。

ダントンは亦かうも云ふ、俺達の「心の底に潜んで嘘をついたり、淫賣したり、盗みや人殺しを働くものの本體」が何かはともかく、俺達は皆「操り人形、見も知らぬ強い力で操られてゐる」。實際、大革命後も人々は「見も知らぬ強い力で操られて」、即ち人間本性まっはに纏まとるまるべき宿命の威力に押流されて、舊來以上に諸々の惡徳あくでに惑溺まどするに至る。この作品が「宿命の悲劇」と評せられる所以であつて、やはり火野葦平が云つた様に、「人間に革命は起らない」のだ。

（岩淵達治譯、岩波文庫）